



「わかること」から「使うこと」への変化とその評価

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 言語習得のプロセスと評価

私たちの言語習得のプロセスは、実はかなり複雑である。今日学んだことがすぐにできるようになるわけでもないし、きちんと学んでいなくてもいつの間にかできてしまうこともある。

後者のようなケースはあり得ないと思われるかもしれないが、言語的に複雑な現象などはメタ的な説明がうまくいかなくても、「言語習得装置 (language acquisition device)」が働いて、しばらくすると(勝手に)できるようになることがある。なんだか理由はよくわからないけれども「絶対これが正しい」などと言えたりするのもこのおかげである。

一方、前者の場合、「教育評価」という観点から考えると深刻な問題を提起することになる。現在、学校教育での評価は、英語に限らず常に学んだ直後に行われているが、これはある種の知識しか見ていないことになるのではないだろうか。本稿では、こうした評価を繰り返すことで、言語習得の大事なものを見落としていないかについて考えてみたい。

2. できるようになるプロセス

以前にもこの連載で書いたが、言語習得の大まかなプロセスを確認しておく、日本で外国語として英語を学ぶ場合は、たいてい教室環境で学ぶことになる。とすると、^{えんえき}演繹的にせよ帰納的にせよ教師がルールを説明し、生徒はまずそのルールを理解しなければならない。したがって、生徒にとっての第一関門は、その「ルールが理解できる」かどうかである。次に問題となるのが、このルールを適用できるか、つまり、「使える」かどうかである。「ルールが理解

できること」と「使えること」は必ずしも同義ではない。さらには、「使えること」と「使うこと」もまた別である。なぜなら、使えるからといって、実際に「使う」かどうかはわからないからである。ある程度、自分でも自信があり、余裕をもって使えるようでない、「使う」と自体を避けてしまうこともある。なお、この場合の「使う」というのは、特定の言語材料を使わなければならないという指定がない状況で、辞書などの参考資料を使わず自力で書いたり、特段の準備をせず即興で話したりする場合のことである。

もう一度整理すると、言語習得には「わかる段階」「使える段階」「使う段階」がある。この観点からこれまでの評価を振り返ると、それはもっぱら「わかる段階」への到達の有無に焦点が当てられていたと言える。もちろん、学習の最初の段階でルールを理解したかどうかという情報は大切である。しかし、それだけでは、全体像を見失っていることになるのではないだろうか。ルールを使えるようになっているかどうか、また使うようになっているかどうかということも、わかることと同じくらい、あるいは、それ以上に重要な情報である。

3. 習得になぜ時間がかかるか

ルールを理解してから、使えるようになったり、使うようになったりするまでには時間がかかるが、その原因はさまざまである。

まず、「操作が複雑なもの」はなかなか使えるようにはならないと考えられる。日本人にとっては、受動態などはこれに当たるかもしれない。be 動詞の正しい形を選択したり、動詞を過去分詞形に変えたりしなければならぬからだ。また、一般動詞の疑

問文も教師が思っている以上に初学者にはやっかいである。これらはどちらも、学習者がその文法項目を使うために、いくつものステップを踏む必要があるものである。

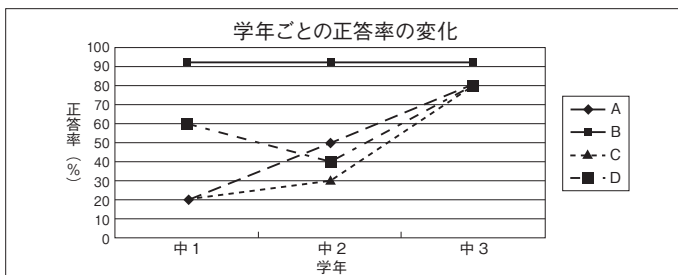
次に、いったん学んで以降、滅多に出会わないものや、あまり使う必要がないものは、なかなか身につかない。例えば、比較級・最上級などは、学んでもそのあとに常に出てくるというわけでもない。

それから、冠詞のようにその概念自体がわかりづらく、イメージ化が難しいものも習得に時間がかかる。冠詞は、名詞につけるだけということで特に複雑な操作は必要なく、学習のほぼ最初の段階から毎日のように出てくる。それにもかかわらず、日本人がなかなか正しく使えるようにならないのは、その概念が意外と（日本人にとって）やっかいだからだろう。

また、ほかにも、指導方法が原因で習得に時間がかかってしまうのではないと思われるものもある。例えば、関係詞はよく2つの文を合体するというように教えられているが、このように教えられると、関係代名詞を含む文を言うためには、あらかじめ2つの文を考えておいた上で、これらの文をつなぐ作業をしなければならなくなる。しかし、まず1つの文を考え、次にその中の名詞を関係代名詞で別の文とつなげるのであれば、それほど負担はかからず使えるようになるかもしれない。それから、使う練習がまったくなされないもの、練習の量が足りないものなども、なかなか使えるようにならないだろう。

4. わかるようになるプロセス

わかるようになるプロセスも、実はさまざまである。下のグラフは、ある英語力調査の中の文法・語彙問題の正答率の変化の概略を示したものである。



この調査では、中学1～3年生が参加し、その中のいくつかの問題は、3学年共通で出題されている。したがって、この共通問題の正答率を見ていくと、1年生で学んだ言語項目が、どのようなパターンでできるようになっていくかがわかる。

このデータを見るまでは、私自身は何となく「徐々に正答率が上がっていく」というようなイメージを持っていた（グラフ中のAのパターン）。しかし、項目の中には、最初からほとんどの生徒が正答しているが、正答率はそれ以上にはあまり上がらない項目もある（グラフ中のBのパターン）。

また、1年生、2年生では正答率が低い、3年生になると正答率が急に上昇する項目もある（グラフ中のCのパターン）。こうした項目は、おそらく本当の理解までにかなり時間がかかるということであろう。

さらに、学習した直後はある程度の正答率を示すが、2年生になるとそれが下がり、3年生でまた上昇を示すものもある（グラフ中のDのパターン）。この原因は明らかではないが、操作性の複雑なものは、学習した直後はそこそこできるが定着はしておらず、本当の意味でできるようになるには、かなりの時間を要するというかもしれない。

5. 観点別・絶対評価への示唆

今日、日本で行われている観点別・絶対評価では、指導の直後にその成否を見ているが、その指導項目がその後どうなっていくかは評価対象となっていない。もちろん、文法などのテストング・ポイントが明確に絞られていない、「ライティング・テスト」や「リーディング・テスト」などでは、その中に既習項目が含まれることはある。しかし、これらはたまたま含まれているのであって、狙って見ているわけではない。長期的展望という視点に基づく評価結果は、今日の日本の評価システムではどこにも行き場がないが、生徒の英語力の発達を追い指導のあり方を考える上では、とても重要なものである。